

## フィナッツァーホーフの夢 —ホーフマンスタール『アンドレーアス』における「解釈のためらい」—

戸 嶋 匠

物語の中で不可解な事象が起きたとき、その事象が登場人物の錯覚や妄想といった自然的・心理的現象であるか、あるいは幽霊やシンクロニシティといった超自然的現象であるか、決定的な判断要素が欠けているため、解釈を迷うことがある。このような「解釈のためらい」という体験を読者にもたらしことこそが「幻想文学」の構造的特性である、とツヴェタン・トドロフは『幻想文学論序説』（1970）で論じた。本発表は、フーゴ・フォン・ホーフマンスタール『アンドレーアス』草稿（1912-13）を、このトドロフの定義にしたがって「幻想文学」として読むことを試みた。

フィナッツァー家滞在中、アンドレーアスは二度夢をみるが、本発表で主に論じたのは一つ目の夢である。その夢の中で彼は、フィナッツァー家の娘ロマーナを追いかけている。ある家に入ってゆく彼女を追う彼は、同性の二人の人物からの不快な接触と、かつて彼が背骨を打ち砕いたという「猫のようでも犬のようでもある」猫に妨げられる。彼が猫を跨いだとき、部屋の中から叫び声が上がるが、両親の衣類の詰まった箆笥と古着に邪魔されて進めない。そこで目が覚めるのだが、彼がこの夢をみている間、彼の従僕ゴットヘルフが女中を縛り、番犬を毒殺し、アンドレーアスの旅費と馬を盗んで逃走していたことがすぐのちに判明する。解釈が分かれるのは、夢をみる前のアンドレーアスが従僕の犯行を予感していたか否かである。予感していたとすれば、猫の虐待という夢内容は、従僕の番犬毒殺に対する無意識的不安の反映であると考えられる。ロマーナのもとに辿り着けないことも彼の男性性の葛藤の問題として説明でき、その限りでこのテキストは「心理小説」として読める。一方、彼が従僕の犯行を予感していなかったとすれば、彼の夢と従僕の犯行はシンクロしていることになる。この超自然的解釈を一貫させるならば、このテキストは、「ドッペルゲンガー」であるアンドレーアスと従僕という二人の人物の（本来同一人物の、善悪を代表する二つの人格の分離である）「ジキルとハイド」的關係性を描く小説として読むことができる。いずれの解釈にもテキストの中に然るべき根拠がある。だがそれらはすべて「状況証拠」であるにとどまり、もう一方の解釈を完全に封じるものではない。

『アンドレーアス』草稿の構造と表現の特色は、一義的解釈を拒む「曖昧さ」にある。この「曖昧さ」をテキストの豊かな「多層性」に読み替えるために、本発表では、フロイト『夢解釈』の「燃える亡きわが子の夢」、ユング心理学の「影」「共時性」の概念との対比を行った。